

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十九年十一月一日発行(毎月一回一日発行)
第十四卷第七号(通巻第一六三号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第163号

11. 2007

熊手市

品川鈴子

桐一葉拾ひて持てば天狗なる

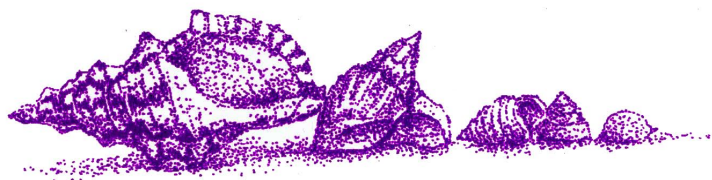
落葉踏み鳩も探るや落し物

旧稿をさがしあぐねて文化の日

月見るも上目遣ひに鞭打症



三本立て菊と媼がたけくらべ
酒場路地酉の熊手が問へたる
酉詣で香具師も混じりて大前に
新走りの酒場に漢ら肩問え
熊手市値切る上方訛もて
上京し稲穂熊手を得る新宿



玉鈴吟

東京 市橋 章子

蝉死せり羽化の途上の姿もて
かなかなや矯正中の歯のきらり
白南風や地酒供へて進水す
ひろしま忌胎内被爆児老いたり
ファイナーレの狂宴めきて揚花火

愛媛 今井 忍

藤棚に足揉む納経終えし後
納経の能筆手の汗拭きて受く
緑蔭に並ぶポニーに乗りたくて
下校児の喧し枝に蛇垂れて
霧纏う鈴緒重たき女人堂

大阪 今谷 脩

撥の指発止々々と西瓜選る
水馬むかし下駄ばき水上棧
手花火の残滓むざんに夜明けたり
肉啖ふ背に山頂の夜涼負ひ
枕許に新涼の使者ウンカ来る

香川 齋部 千里

ゴンドラの中で鳴き出す籠の蝉
風鈴の駅に降り立つ国なまり
梅雨明けにゆったり廻る大水車
蝉声に混りて鳴ける法師蝉
どの墓も盆の供華にて華やげり

兵庫 浮田 胤子

池あふれぬもり赤腹みせ流る
ペランダの木の芽むさぼる揚羽の子
汗りんりアイスクリームより搔氷
台風にも小屋の屋根石微動せず
死んだふりせるぶんぶんを猫知らず

兵庫 馬越 幸子

地藏尊在さぬ公園盆踊り
凌霄花満中陰の軒を這ふ
まだ来ぬかビーチボールを膨らます
指しやぶり卒業したる夏休み
背の窪に砂粒つきしまま昼寝

大 阪 大 井 邦 子

蝉しぐれ病臥の母に眉間皺
炎天の御手洗作法なき子らに
涼風は木の香を含む神の山
名刹の草取りのみを業とせり
兄弟が競ふ西瓜の種とばし

東 京 大 川 富 美 子

やうやくに馴じみきし街風薫る
土用干し明治の母に座り胼胝
森若葉切絵のごとき影を踏み
兜虫をさな馴じみに逢ひしごと
経唄の暑をよせつけず涼しかり

香 川 大 空 純 子

走り星好きな部活に燃え尽きる
宿題の手伝いできず秋あつし
真つ白な入道雲に潜りたい
釣り人の渉る仕舞合歡の花
合歡の花赤いヒールで待ち合わせ

兵 庫 岡 有 志

腹痛の阿吽の氣息夏を病む
麻酔下に胆嚢切除汗匂ふ
屋上宴妙法の火を拝み果つ
灯の入りし金魚ねぶたを曳きゆくよ
ビヤガーデン卓を占めたる女性群

埼 玉 岡 田 章 子

緑蔭に演ず中国雑技団
夏館金唐革紙壁に映ゆ
遠花火見ゆる門先賑はへり
採りたての茄子並べ置く草の上
滴りを集めし手水清めたり

愛 媛 岡 野 峯 代

帰省子が祖父を見舞うに漢声
掌の葉弄る今朝の秋
のけぞりてまだプールだと駄々を捏ね
老鶯のとつとつ鳴くに話し折れ
病床へ力瘤延す雲の峰

大 阪 岡 本 幸 枝

梅雨の川酒蔵に酔ひ舟に酔ひ
梅雨じめり艶話もあり十石舟
油照り身を振らせて裏梯子
宵飾格子の向こうに蕪村の絵
少年のキャンブ土産は似顔石

大 阪 奥 田 妙 子

神輿洗ひ鴨川の水汲み上げて
梅雨晴れ間十石舟の船出待つ
龍馬の間行灯一つ梅雨明り
梅雨冷えの書画に龍馬の心意氣
寺田屋の表玄関梅雨湿り

薬草歳時記

(一六二) サルトリイバラ (猿捕次)

牛尾曜子

炉なごりの小柴にまじる山帰来 石原 八束

晩秋にサンゴ玉のような赤い実が美しく、生花の花材にもよく使われる。

ユリ科、シオデ属、漢名は拔葵^{バツカウ} (Green Briar) 猿捕次の意味は、字句のとおりで、実を食べに来た猿が、刺にひっかかって捕まるところからきている。この実はリースの飾りに最高の素材で、赤くなる直前の緑の実を採取して乾かすと白くなり、紅白のリースが出来る。別名はサンキライ (山帰来)、西日本では端午の節句に柏の葉の代わりに、この葉で包みサンキライ餅と呼ぶ地方もある。生花、俳句の世界でも、山帰来と呼んでいる。

山帰来の名の由来は、梅毒に患って山に捨てられた男が、この実を食べて元気に帰ってきた、という故事に基づくととも言われ、中国自生のつる性木本の別種、同属の植物、土茯苓^{どふろう}の異名、山奇粮^{さんきりやう}が訛って、日本で付けられた漢字名

だとも言われる。

サルトリイバラの有効成分はサポニン、西洋医学では主として去痰剤として応用される。中薬では、解毒剤との観点で用いている。痛風、利尿排泄作用があり、梅毒に全く効果がないわけでもない。一般に葉をお茶代わりに飲むと諸毒を去るとして、盛んに用いられてきた。十月〜二月の間に根茎を掘り、茎、ヒゲ根を取り、水洗いし、刻んで天日乾燥させる (漢方薬局にて入手可)、根茎を煎じて服用する。発汗、利尿、止瀉、解毒剤として、糖尿病、膀胱炎、尿毒症、腎臓病、心臓病、頻尿、夜尿症、関節痛、腰痛、神経痛、リウマチ、梅毒、胎毒、腫れ物、下痢、こしけ、カゼ等。

根茎を十五〜二〇gを六〇〇ccの水で半量になるまで煎じ、これを一日量として、数回に分けて飲む。根茎の二〜三%水煎液はうがい料となる。

参考文献

- 「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館
- 「草木スケッチ帳」東方出版
- 「薬草図鑑」家の光協会
- 「薬草」山と溪谷社
- 著者略歴 神戸薬科大学卒

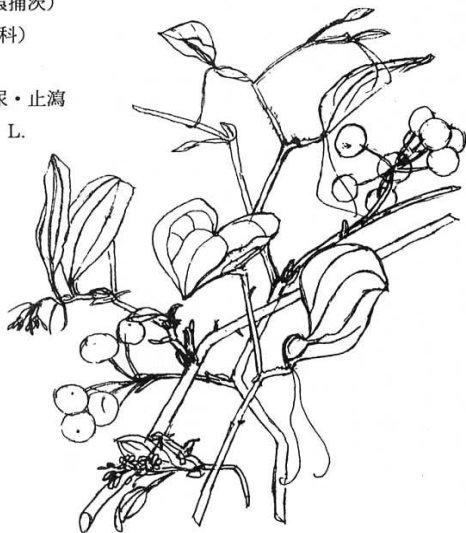
サルトリイバラ (猿捕茨)

[シオデ属] (ゆり科)

山帰来 (土茯苓)

大百中飲 利尿・止瀉

Smilax China L.



花序
液果

薬用部分：
根茎 (菝葜)



中田若子画

山帰来石は鏡のごとくなり

川端 茅舎

山帰来険しき山の七曲

石塚 友二

雨やんで巖這ふ雲や山帰来

飯田 蛇笏

やすらひてさるとりの花杖にあぐ

中村 若沙

岩の上に咲いてこぼれぬ山帰来

村上 鬼城

近道は険しさるとりいばらの実

千原 叡子

海まぶしくて山帰来花散らす

青山志解樹

としよりの早読みさるとりいばらの花

増山 美島

差押へられし門扉に山帰来

勝野 薫

山帰来の実と枝リースに加へたり

塩野 眞一

(ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

旅人の座とする路傍の大かぼちゃ
大坂 井上あき子

アイヌコタンの踊りゆうらり夕黄菅

忘れもの不図思い出すねこじやらし

破芭蕉ブンガワンソ口の橋錆びて

葡萄狩親子が覗く糖度計
愛媛 沖 則文

昼下り名越なごせの茅刈る線路沿い

観覧車真赤に染めし大夕焼

葉の裏でじつと夜を待つ蛩たち

大海亀可愛らしい目夏ひざし
兵庫 木津左耶子

イルカショー素速き跳びに大喝采

天神祭元は氏子よテレビ見て

袴の祖父ゐて吾は祭稚児

短夜を笑顔の兄と夢別れ
愛媛 羽生きよみ

炎昼の我が黒き影兄に似て

葬送の入道雲は兄の顔

風鈴の鳴りだし兄の葬終る

占ひのすすめで作る冷さうめん
東京 片野 光子

蝉しぐれ野外ライブに乱入す

爪立ててたましひ残る蝉の殻

曖昧な記憶と散りぬ遠花火

枇杷の実や少年Hぬし長屋
兵庫 松本 恒司

酢漿かたはみの弾けバレエのトウシューズ

店先に鍼力のおもちや古都の夏

手花火をかこむ籬の四世代

訝る児目を見開く児秋のグミ
兵庫 太田 實

今日よりはわが家の十夜妻を抱く

土止め木に生ふる茸や隠れ道

温容を貫きし母文化の日

花莫蔭の匂ひて座敷生き返る
兵庫 岡本 幸代

竜胆の青引き締むる墓の前

蝉しぐれ指揮者はいづこ曲かはる

新樹背に語らひは何比翼塚

ひまわりや知らぬ顔して愚痴を聞く
兵庫 改正 節夫

朝顔の蔓の伸び過ぎ寄る辺なし

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十五句 岡田 章子 //

*選句は全て 品川鈴子

旅人の座とする路傍の大かぼちゃ

井上あき子

袴の祖父ゐて吾は祭稚児

木津左耶子

道端にでんと大かぼちゃが据えられているのは、外国の田園風景でしょうか。日本の野菜とは違い化け物のようなそれを観ただけでも異国情緒。知人もいない気楽さに、大かぼちゃにちよつと腰掛けて旅疲れを癒すと、遙々と遠くまで旅路を辿つたものだと感慨も一入。

葡萄狩親子が覗く糖度計

沖 則文

風鈴の鳴りだし兄の葬終る

羽生きよみ

葡萄狩りに来た親子連れには、葡萄もさることながら、ぶどう園に在る糖度計がもの珍しい。自分達の勘で美味しそうな房を選び採つたが、果たして甘味はどの位だろうかと、親子が不慣れな手つきで測つた糖度計の目盛りを、代わり番こに覗き込む。理科の親子教室とながらに興味深々。

ライン川へ急傾斜する西ドイツの葡萄畑での作

糖度計あるよ葡萄の畑毎に

鈴子（昭60年）

がある。昔は私も分析でよく使つた手軽な器械です。

日本の三大祭りで名高い天満天神宮の氏子だった作者は、日本舞踊を教えながら齢を重ね、今も色白で無垢な差はじらいを示す。さぞ可愛い稚児さんだったでしょう。同じ行列に居る祖父は目を細めて見守り、孫も立派な袴姿を頼もしく仰いだことでしょう。古き佳き想い出のひとこま。

幼い頃からずつと頼りにして来て、成長してからも、困つた時にはいつも相談に乗つてもらつた兄、思えば親よりも、夫よりも長い年月の付き合いであった。葬儀の間中さまさまの思い出に浸っている内、風鈴の音にはつと我に返ると、もう式は終わろうとしている。作者の心情が伝わつて来て、亡き兄上の人柄までも偲ばれる佳句と思います。

占ひのすすめで作る冷さうめん

片野 光子

朝、いつもの習慣で運勢欄に目をやる。或いはテレビのチャンネルを合わせたのか。「〇〇座冷さうめん」とある。

昼はこれに決めた！好物の冷しそうめんを食べてつきが廻ってくるなんて。まだ食べない内から早くも幸運を掴んだような気分の作者。楽しい句。

手花火をかこむ籬の四世代

松本 恒司

四世代というだけで、健やかに過されているご一家の様子子がわかります。風を避けて籬の近くに集り、花火を持っている一番若い世代の手もとを、皆で見つめているのでしょう。団欒の景が目には浮かぶような句です。

土止め木に生ふる茸や隠れ道

太田 實

隠れ道というのだから狭い道でしょうね。土止めに使うのは、何か堅い木なのでしょう。土の湿り気でもいつも濡れているので、茸が生えてきた。時折見かける景ですが、それを見逃さず一句にまとめたのはさすが。

蝉しぐれ指揮者はいづこ曲かはる

岡本 幸代

暑苦しさが一段と増すような蝉しぐれ。それがいつの間

にか静かになつている。あれつと思つてみると又一斉に鳴き出す。言われて見れば、それはまるで指揮者がいるかのように整然と行われている。違いはわからないが一度終われば鳴き方も変わるのかも。蝉しぐれのユニークな捕らえ方に感心しました。

ひまわりや知らぬ顔して愚痴を聞く 改正 節夫

そ知らぬ顔で愚痴を聞いてあげているが、何もかもお見通しなのである。そこに咲いているひまわりのそっぽを向いている風情が作者と同じように、愚痴を聞いているように受け取れて面白い。ひまわりとの取り合わせがよかつたと思います。

花藻透く川に浸せる茶のやかん 中崎 敏子

野良仕事に出る時、お茶を入れて持つて来た大きなやかんが清流に浸してある。「仕事終えた後やお弁当の時までには、程よく冷えて、ごくくと咽が鳴るのが聞こえて来そう。昔はやかんの蓋で飲んでいた。のどかな田園風景の、一枚の絵になるような句です。